第8講 古文と漢文

仮名遣い／古語／動作をしている人物／現代のことばの記述／鑑賞文／返り点

読み方のコツ 10分 | 例題 10分 | 練習 30分 | 作文 15分 | 確認テスト 10分

読み方のコツ1　仮名遣い・古語・動作をしている人物

入試の形　大問二が古文。本文は約百五十～三百字で、横の現代語の注を本文に入れて読む。歴史的仮名遣いの問いは、入試に毎年ある。

一　**仮名遣いは「すべてひらがな」**　漢字を残さない。語の頭の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は変えない。

二　**古語は前後から決める**　今と意味がちがう語がねらわれる。選択肢を傍線部に入れて読む。

三　**動作をしている人物**　登場人物に印をつける。「～て」でつながる動作は人物が同じことが多い。「～ば」「～に」「～ど」のあとは変わりやすい。

歴史的仮名遣い → 現代仮名遣い		例
①	語の頭以外の**は・ひ・ふ・へ・ほ** → わ・い・う・え・お	あはれ→あわれ　いふ→いう 思ひ→思い　かへる→かえる
②	**ゐ・ゑ・を** → い・え・お	ゐる→いる　こゑ→こえ をかし→おかし
③	**ぢ・づ** → じ・ず	もみぢ→もみじ　よろづ→よろず
④	**くわ・ぐわ** → か・が	くわじ（火事）→かじ
⑤	**あう・かう・さう・やう**など（ア段＋う）→ おう・こう・そう・よう	やうやう→ようよう さうらふ→そうろう
⑥	**いう・しう**など（イ段＋う）→ ゆう・しゅう	いうなり→ゆうなり
⑦	**えう・てう**など（エ段＋う）→ よう・ちょう	てうど→ちょうど けふ→けう→きょう

よく出る古語	意味	よく出る古語	意味
いと	たいそう	あやし	不思議だ／身分が低い
げに	本当に・なるほど	いみじ	たいそう・ひどい
やがて	すぐに・そのまま	めでたし	すばらしい
年ごろ	長年	ありがたし	めったにない

問一　現代かなづかいになおし、すべてひらがなで書きなさい。（1）かはら［　　］（2）こゑ［　　］（3）やうす［　　］

問二　播磨上人（はりまじやうにん）、衣裳（いしやう）を思ひ煩（わづら）ひて（着るもののことで悩んで）、高野（かうや）（高野山）を退出す。大門のほとりにて、鹿の冬毛に㋐生ひ変はりたるを見て、㋑立ち帰りて住山（山に住み続ける）、云々（ということだ）。（『一言芳談抄』による）

右の文章の㋐・㋑の動作をしているものの組み合わせを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　㋐鹿　㋑鹿　　イ　㋐上人　㋑鹿　　ウ　㋐鹿　㋑上人　　エ　㋐上人　㋑上人

読み方のコツ2　現代のことばの記述・鑑賞文・脱文挿入・返り点

現代のことばで書く記述　「本文の内容から読み取って、現代のことばで○字以上、○字以内で書きなさい。」本文に線を引き、注を使って現代語に直す。古語をそのまま書かない。主語が省かれていれば補う。最後に、まとめ文につないで読む。

【鑑賞文の一部】　本文について書かれた文章の空欄を、本文から抜き出す。令和○年度に出た形である。空欄の前後のことばが、本文のどの部分の言いかえかを探す。抜き出すときは、本文の表記のまま写す。

古文の脱文挿入　入れる一文の内容を現代語で考える。「うれしい」「困った」などの気持ちなら、話の流れのどこに合うかを見る。

返り点　入試では、書き下し文の読み方になる返り点を選ぶ問いが出た。**レ点**は、すぐ下の字から一字上へ返る。**一・二点**は、二字以上はなれた字へ返る。上から読み、返り点のある字は飛ばして、読む順番を指でたどる。「於」など、書き下し文で読まない字もある。

例　歳月不待人（レレ）　→　読む順は　歳月・人・待・不　→　歳月人を待たず

問一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

法然上人云（ほふねんしやうにんいはく）、「一丈（いちぢやう）（約三メートル）の堀を越えむと思はん人は、一丈五尺（約四・五メートル）を越えんと励むべきなり。往生（わうじやう）（極楽に生まれること）を期（ご）せむ人は、決定（けつぢやう）の信（必ずそうなると固く信じる心）をとりて、しかもあひ励むべきなり」。（『一言芳談抄』による）

法然上人は、一丈の堀を越えようと思う人はどうするべきだと述べているか。［　　］に入る内容を、現代のことばで十字以上、十五字以内で書きなさい。

一丈の堀を越えようと思う人は、［　　］べきである。

問二　「歳月人を待たず」という読み方になるように返り点を付けたものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　歳月不待人（二）　イ　歳月不待人（レ）　ウ　歳月不待人（レレ）　エ　歳月不待人（レ）

例題　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

敬仏房（鎌倉時代の僧）、奥州の方（東北地方の方面）修行の時、寄宿しける在家（泊めてもらったふつうの家）の、四壁・大堺（まわりの壁や、屋敷の境の垣）みな破れて住み荒らせる体（荒れたままにしているありさま）なり。㋐そのゆゑを問ふに、亭主（その家の主人）答へて云はく、「名取郡（今の宮城県にあった地名）に移り住むべきゆゑなり」云々。敬仏房、これを聞きて落涙し、同行（ともに修行する仲間）に示して云はく、「欣求の心（極楽に生まれたいと願う心）あらば、自然に穢土（この世）を執すべからず（強く思いつづけることはないはずだ）」。

（『一言芳談抄』による。一部省略）

例題の問いと解き方

問一　二重傍線部㋐を現代かなづかいになおして、すべてひらがなで書きなさい。

問二　「問ふ」と「答へて」の動作をしている人物を、本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

問三　亭主が家を荒れたままにしているのはなぜか。本文の内容から読み取って、現代のことばで十字以上、二十字以内で書きなさい。

解き方　問一　「ゆゑ」の「ゑ」→「え」、「問ふ」の「ふ」→「う」。「問ふ」は「とう」とひらがなで書く。**そのゆえをとうに**。「そのゆえを問うに」は漢字が残っているので誤り。

問二　「問ふに、亭主答へて」の「に」のあとで人物が変わる。答えたのは**亭主**。問うたのは、泊めてもらって家の様子を見た**敬仏房**。

問三　亭主の答え「名取郡に移り住むべきゆゑなり」を直す。「べき」は「〜するつもり」、「ゆゑなり」は「〜だからだ」。**近いうちに名取郡に移り住むつもりだから**（十九字）。

話の読み取り　移り住む先が決まっている人は、今の家を直さない。同じように、極楽を願う心があれば、この世のことに心を残さないはずだ。敬仏房は亭主のことばをそう受け取って涙を流した。

練習一　次の文章は、世阿弥が、十七、八歳のころの能の稽古について述べたものである。読んで、あとの問いに答えなさい。

この頃は又、あまりの大事（たいへん難しい時期）にて、稽古多からず（稽古のしかたも多くはない）。先づ、声変りぬれば、第一の花（花＝芸の魅力）失せたり。体も腰高（腰が高く、体つきが不安定）になれば、かかり（姿の美しさ）失せて、過ぎし比の声もさかりに、花やかに、易かりし時分の移りに（楽にできた時期から移り変わって）、手立（やり方）はたと変りぬれば、気を失ふ（やる気をなくす）。結句（そのうえ）、見物衆も①をかしげなる気色（おかしそうな様子）見えぬれば、恥しさと申し（恥ずかしさといい）、かれこれ（あれこれで）、ここにて②退屈するなり。

此の頃の稽古には、ただ、指をさして人に笑はるるとも、それをばⓐかへりみず、内にては（内輪の稽古では）、声の届かん調子にて（声が無理なく届く高さで）、宵暁の声を使ひ（夜や明け方に声の稽古をして）、心中には願力（固い決心）を起して、一期の堺（一生の分かれ目）ここなりと、生涯にかけて、能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし。

（『風姿花伝』による。一部省略）

問一　二重傍線部ⓐを現代かなづかいになおして、すべてひらがなで書きなさい。

問二　①をかしげなる気色を見せているのはだれか。本文中から三字で抜き出しなさい。

問三　②退屈するの意味として最も適しているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　することがなくて、時間をもてあます。
イ　気持ちがくじけて、続ける気力をなくす。
ウ　人に笑われないように、急いで逃げ出す。
エ　声の出し方を変えて、工夫をこらす。

問四　世阿弥は、この時期の稽古の心がまえをどのように述べているか。次の文の［　　］に入る内容を、本文の内容から読み取って、現代のことばで二十字以上、三十字以内で書きなさい。

人に笑われても気にせず、［　　］という心がまえで稽古をする。

問五　次は、この文章についての【鑑賞文の一部】である。［　a　］、［　b　］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中からそれぞれ四字で抜き出しなさい。

【鑑賞文の一部】

世阿弥は、十七、八歳のころを、能を続けるうえでの大きな山場として語っている。声変わりによって子どものころの［　a　］が失われ、見物の人にまで笑われそうになると、だれでも気持ちがくじける。しかし世阿弥は、この苦しい時期こそが［　b　］だと心に決めて稽古を続けよ、ここでやめれば能はそこで終わってしまうと説いている。

a

b

解き終わったら

一　**注を本文に入れて、もう一度通して読む**　「気を失ふ」や「退屈する」のように、今と意味がちがうことばに印をつける。

二　**記述に古語が残っていないか見る**　現代のことばで書く問いでは、本文の語をそのまま写さない。

三　**抜き出しは本文の表記のまま**　抜き出しの問いでは、反対に、本文の字をそのまま写す。

練習二　次の文章は、杉田玄白が前野良沢らと解剖書『ターヘル・アナトミア』の翻訳を始めたころのことを書いたものである。「翁」は玄白自身のこと。読んで、あとの問いに答えなさい。

其翌日良沢が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づ彼ターヘルアナトミアの書にうち向ひしに、誠に艫舵なき船の大海に乗出せしが如く、茫洋として寄べきなく（広々としてたよるところもなく）、只あきれにあきれて居たる迄なり。［ア］譬へば眉といふものは、目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として（ぼんやりとして）長き日の春の一日には明らめられず、日暮る迄考へ詰め、互ににらみ合て、僅一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり。［イ］又或る日鼻の所にて、フルヘツヘンドせしものなりとあるに至りしに、此語わからず。ようやく長崎より良沢求め帰りし、簡略なる一小冊ありしを見合たるに、フルヘツヘンドの釈註（説明）に、木の枝を断ちたる迹、其迹フルヘツヘンドをなし、又庭を掃除すれば其塵土聚り、フルヘツヘンドすといふ様によみ出せり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ㋐考へ合ふに、①弁へ兼たり。［ウ］

時に翁思ふに、木の枝を断りたる跡癒れば堆くなり、又掃除して塵土あつまれば、これもうづたかくなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、フルヘツヘンドは堆といふことなるべし。然れば此語は堆と訳しては如何といひければ、各これを聞て、甚だ尤なり、堆と訳さば正当すべしと決定せり。［エ］如此事にて堆と訳語を定めり。

（『蘭学事始』による。一部省略）

問一　二重傍線部㋐を現代かなづかいになおして、すべてひらがなで書きなさい。

問二　①弁へ兼たりの意味として最も適しているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　理解することができなかった　　イ　人に教えることができた

ウ　すぐに忘れてしまった　　エ　言いわけをしなかった

問三　本文中には次の一文が入る。入る場所として最も適しているものを、本文中の［ア］～［エ］から一つ選び、記号で答えなさい。

其時のうれしさは何にたとへんかたもなく、連城の玉（たいへん貴重な宝玉）をも得し心地せり。

問四　翁が、フルヘツヘンドは「堆し」という意味だと考えたのはなぜか。次の文の［　　］に入る内容を、本文の内容から読み取って、現代のことばで三十字以上、四十字以内で書きなさい。

［　　］から。

問五　本文で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　玄白たちは、長崎で習ったオランダ語の力で、初めからこの書を順調に読み進めた。

イ　「眉」についての一句は、春の長い一日をかけても意味がはっきりしなかった。

ウ　「フルヘツヘンド」の意味は、良沢の持ち帰った小冊にはっきり書かれていた。

エ　翁の考えた訳語に仲間は反対したが、最後は翁の意見どおりに決まった。

問一　「千里の行も足下より始まる」という読み方になるように返り点を付けたものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。ただし、「於」は書き下し文では読まない字である。

ア　千里之行、始於足下

イ　千里之行、始於足下

ウ　千里之行、始於足下

エ　千里之行、始於足下

作文の型3　聞き手に話すように書く（15分）

型　①紹介することばと意味→②自分の体験→③聞き手への呼びかけ。文末は「です・ます」にそろえ、全文を書く。

作文3　あなたは、小学校の六年生に、中学校生活に役立つことばを紹介する話をする。次のA、Bから一つ選び、実際に話す内容を、条件1～3にしたがって二百六十字以内で書きなさい。

A　温故知新（昔を学び、新しい考えを得る）　B　失敗は成功のもと（失敗を直せば成功につながる）

条件1　最初に、選んだことばとその意味を紹介すること。

条件2　次に、そのことばと関連するあなたの体験を書くこと。

条件3　最後に、聞き手への呼びかけを入れること。実際に話すように書き、あいさつと自己紹介は書かないこと。

確認テスト（10分・100点）　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

御堂関白（藤原道長）、ものへおはしける（お出かけになった）に、道に荷負馬（荷物を運ぶ馬）の先に立ちたる小童（小さな子ども）の、手に文（書物）をさげて①読みけるを、「②あやし」と思して（お思いになって）、近く召し寄せて御覧じければ、目に重瞳（一つの目にひとみが二つあること）ありて、いみじく賢き相（顔つき）のしたりければ、やがて③召して匡衡（学者の大江匡衡）につけて学問せさせられけるほどに、後には大江時棟とて、広才博覧（学問が広く深いこと）の文士なりければ、君にⓐ仕へて博士の道を継げり。

（『十訓抄』による。一部省略）

問一　二重傍線部ⓐを現代かなづかいになおして、すべてひらがなで書きなさい。（20点）

問二　②あやしのここでの意味として最も適しているものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（20点）

ア　かわいらしい　　イ　危ない　　ウ　不思議だ　　エ　にくらしい

問三　①読みける、③召しての動作をしている人物の組み合わせとして最も適しているものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（30点）

ア　①御堂関白　③小童　　イ　①小童　③匡衡

ウ　①匡衡　③御堂関白　　エ　①小童　③御堂関白

問四　御堂関白が、小童に学問をさせたのはなぜか。［　　］に入る内容を、本文の内容から読み取って、現代のことばで二十字以上、三十字以内で書きなさい。（30点）

小童の［　　］から。

解答（答えと短い解き方）

第3講　古文と漢文

コツ1の確かめ

問一　（1）かわら　（2）こえ　（3）ようす

（1）語の頭以外の「は」→「わ」。（2）「ゑ」→「え」。（3）「やう」は「ア段＋う」なので「よう」。

問二　ウ

「見て、立ち帰りて」と「て」でつながるので、見た人と帰った人は同じ（上人）。

コツ2の確かめ

問一　（例）一丈五尺を越えようと努力する（十四字）

「越えん」の「ん」は「〜よう」、「励む」は「努力する」。採点の要素：①一丈五尺　②越えようと努力する。

問二　ウ

読む順は「歳・月・人・待・不」。一字上に返るので「待」と「不」にレ点。

練習一　古文（入試の形）

問一　かえりみず

語の頭以外の「へ」→「え」（決まり①）。

問二　見物衆

「見物衆も……見えぬれば」の「も」は主語につく形。おかしそうな様子を見せるのは舞台を見ている人々。

問三　イ

前の「気を失ふ」「恥しさと申し、かれこれ」の流れから、心がくじける意味。アは今のことばの意味。

問四　（例）ここが一生の分かれ目だと思い、生涯能を捨てないと決める（二十七字）

注を使って現代語に直す。採点の要素：①ここが一生の分かれ目だ　②生涯能を捨てない。

問五　a　第一の花　b　一期の堺

a：「声変りぬれば、第一の花失せたり」の言いかえ。b：「一期の堺ここなり」の「ここ」が「この苦しい時期」。

練習二　古文（入試の形）

問一　かんがえあうに

「考へ」の「へ」→「え」、「合ふ」の「ふ」→「う」。「考えあうに」のように漢字を残さない。

問二　ア

「弁ふ」は見分けて理解すること、「〜かぬ」は「〜できない」。この時点では意味がわからなかった。

問三　エ

「うれしさ」とあるので、苦労が報われた場面。［エ］の前で「堆」という訳が決まった。

問四　（例）枝を切った跡も集めたちりも盛り上がり、鼻も顔の中で盛り上がっている（三十三字）

採点の要素：①枝を切った跡が盛り上がる　②集めたちりが盛り上がる　③鼻も顔の中で盛り上がっている。

問五　イ

イ：「長き日の春の一日には明らめられず」と合う。ア：本文と逆（「あきれにあきれて」）。

漢文の返り点

問一　イ

「足・下」の二字を飛びこえて「始」へ返るので、レ点ではなく一・二点。「下」に一点、「始」に二点。

作文3

（解答例）

私がみなさんに紹介したいことばは、「失敗は成功のもと」です。失敗しても、原因を考えて直せば、次の成功につながるという意味です。

私は中学一年生の合唱コンクールで指揮をしましたが、合図をまちがえて、歌い出しがそろいませんでした。くやしくて録画を見直すと、緊張して腕が小さくなっていたことに気づきました。そこで毎日鏡の前で練習し、翌年は最後までやりとげることができました。

みなさんも、中学校で失敗することがあるでしょう。そのときは、どこを直せばよいかを考えてみてください。

採点の要素：①ことばを選び、意味を紹介　②体験が選んだことばと結びつく　③六年生への呼びかけ　④話の順番。

確認テスト

問一　つかえて　（20点）

語の頭以外の「へ」→「え」。「仕えて」のように漢字を残さない。

問二　ウ　（20点）

馬を引く小さな子どもが歩きながら書物を読んでいるのを見て、不思議に思った。だから近くに呼び寄せた。

問三 エ（30点）

①「小童の」の「の」は「が」の意味で、読んでいたのは小童。③「召す」は尊敬の語で、御堂関白の動作。

問四 （例）目に重瞳があり、たいそう賢そうな顔つきをしていた（二十四字）（30点）

「いみじく」は「たいそう」。採点の要素：①目に重瞳がある　②たいそう賢そうな顔つき。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。

古文の本文の一部は、やたがらすナビ（https://yatanavi.org/）の次の校訂本文をもとに、表記を改め、一部を省くなどして使っています。
中川聡／Satoshi Nakagawa『一言芳談抄』https://yatanavi.org/text/ichigonhodan/index.html（CC BY-SA 4.0）
中川聡／Satoshi Nakagawa『十訓抄』https://yatanavi.org/text/jikkinsho/index.html（CC BY-SA 4.0）
これらを改めた古文の本文（注・問題・解説はふくみません）は、同じCC BY-SA 4.0で提供します。
CC BY-SA 4.0 の内容： https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja